
とある夫婦の、アイ的対話集

桐子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある夫婦の、アイ的対話集

【Nコード】

N5973W

【作者名】

桐子

【あらすじ】

とある夫婦の、ロマンチック：“的”対話集。会話を中心としたやり取りです。仄かに和風、陰陽師もどきな空気が漂いつつ「近い将来体力を消耗することが決定したので、現在絶賛体力温存中です」「本当に、よく回る口だな」

そんな、二人

向き合う男女の間に、一通りの書道具がある。

墨も足され、すぐ真白の紙に文字が生まれるだろうに。

二人はただ、何もない紙を見つめる。

「そんなに名付け、が大事か？」

柳色の着物をまとった青年が問う。

正面に座った、Tシャツにジーンズの少女が答える。

「命名、は文化人類学の視点から述べると二つ、意味があるそうです」

「二つも？」

「はい。一つは一清さんがご存知の通り、“ラベル”を貼り付けること」

「それ以外に何がある？」

「もう一つは“区別”をつけ、存在させることです」

「存在させる…」

「はい。この例には色がよく使われます。虹は日本では七色ですが、国によっては三色とみたり、八色にみたり」

少女が部屋の隅に置かれた花器に、まとめられた草花を示す

「差をつけることで、緑のなかから、黄緑色が生まれたり。

赤のなかに朱、紅をつくり、青の中に蒼、藍、縹を生んだり。

・・・差を生んだのか、違う国の差を混ぜたのかは色の歴史を知らねばわかりませんけど」

だから、名前は大事なのではないでしようか。
対象を“もの”という括りから区別をつけ、“個”を存在させるの
ですから

「橘の中であなたを区切り、存在させるのに一清という名があると
いうことです。

ということで一清さん」

「子どもの名前わりと真剣に考えましよう？」

目というものについて

見鬼、という才がある。

文字通り、鬼、人でないものを“視る”異能。

退治屋の血筋には必須であるが、いまやその力を持つものは少ない。少ないからこそ、あれば脅威と、狙われる。

身内にも、また、異形にも。

「あなたは、目を恨みますか？」

畳に敷かれた布団に、横になった青年がいる。

パジャマ代わりの単衣から除く腕には包帯が巻きつけられ、些かやつれた様にも見える。

養生している彼の横に、常のごとくTシャツジーンズの少女がいた。彼女は布団の傍に座して、ただ彼を見つめ、問いかける。

特に表情が浮かぶことなく、声に感情を含むことなく。ただ、淡々と、事務的に。

青年は一瞬彼女を見、視線を天井に戻した。

「見えなければいいと、思っていたことはあった」

「でもあなたは、聞くことも触れることも匂うことも、おそらく、味を知ることまでできる」

ふ、と青年が笑った。己を嘲るように。

「五感が…おかしいのか。……俺は、人か？」

「細胞レベルでは分かりませんが、身体的特徴、心理的反応、生理的反応は人です。」

ちなみに血液の検査値データ、循環、呼吸機能は概ね正常みたいです。

ちょっと貧血気味らしいですけど」

……。

沈黙が流れた。呆けた顔を戻した青年が、傍らの少女を胡乱げに見た。

「…なんだそれは、どこで聞いた」

「以前の健診時、あなたが医師からの説明を面倒がって私に押しつけたじゃありませんか」

「…なるほど」

「ここでひとつ、甘い台詞でもいかがですか？」

彼女が小首を傾げた。

「その目があったから私達は出会ったんですよ」

(…)

(…あれ、照れてます?)

(真顔で言わなきゃな)

(では次の課題に)

(よ
せ)
(

男とは

少女が畳に押し倒された。

その前に何があったのか、何を言ったのか、さして問題ではなく。ただ彼女は、彼に押し倒された。

しばし黙して瞬いた彼女は、自分を見下ろす青年をじい、と見る。

「あなたも男ということですか」

「俺が聖人君子とでも？」

「あなたはむしろ絶対王政巻き込まれ派ですからね」

「何だ、それは」

「いいえ」

実はあなた、結構不器用なのは、なんて。分かりきったことを思っただけです。

零れた独白に、青年は呆れた。

「お前、もう少し危機感を」

「野郎が乗ってる時点で体力のない私はグブアップです。」

将来的に体力消耗することが決定したので、現在絶賛体力温存中です」

「本当に、よく回る口だな」

「塞いでみますか？」

「直接的すぎる。女だろう」

「一清さんは男でしょう」

「だから」

「男性は老年期になっても生殖機能変わりませんので、長期にわたる体力消耗が……むぐっ」

ほがむが、と手のひらで話そうとする彼女を、青年はふかーく息を吐いて解放した。

（せめてお喋りさせて下さいよ）

（それが問題なんだろう）

（で、続きはいいんですか？）

（俺も今のうちに体力温存）

（じいさんみたいですわねえ。あいた）

眠りにつく頃

「少し、眠らせて下さい」

少女は言って、横になったまま彼を見上げた。

彼はとても怒っていた。とてもとても、怖い怒気をまとっていた。

（言い訳をたくさん考えておきます。だから、今は、眠らせて下さい）

目を閉じかけた彼女。

その髪を掴む指。皮膚が引かれて、強引に顔を上げさせた彼。

髪が何本か引きちぎられた音。痛みのために上る小さな呻き声

「誰か…」

一清が唸った。かみ殺すように

「この馬鹿をさっさと病院に運べ」

（大げさですよ、寝てただけなのに）

（頭部強打してぶっ倒れてたんだろう）

（油断しました）

（何にだ）

（睡魔にです）

両の腕を背中に回して

「んー…」

「お悩みですか。髭のおじじ様に何か言われましたか」

「いや、ちが…オイ」

「はい？」

「橘宗家先代当主を…あー」

「なかなか、あそこまで見事なお髭な珍しいかと」

「…なんで目が煌めいてんだ？」

「上の立場で髭を生やし、かつお手入れする男性って今では珍しいんですよ」

「そうなのか？…あー、そういえば」

「で、ですね」

「あ？」

「お話なら聞きますよ？聞くだけですけど」

「聞くだけだよ」

「聞くだけです。聞くだけで人は自分で問題を解決できる力を出すそうです。」

ほら、ですからどーんと吐き出してください」

「お前なあ…」

「致し方ありません。私はこちらの事情に疎い上にさして役に立つような…わわっ」

「こっちがいい」

「……タッチングですか？ですが、話を聞いていないのにあなたにとって効果的とは思えません」

「……せめてスキンシップと言ってくれ」

「日本でしか通じない英語は好きません」

「そーかよ」

「それにしてもあったかいですね」

「うお」

「いい匂いです。お香ですか。私は香道に通じはいますが…よくあるお線香とは違いますねえ」

「か、ぐ、な！」

（顔が真っ赤ですよ）

（この体制で…いや、もういい）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5973w/>

とある夫婦の、アイ的対話集

2011年11月17日09時39分発行